
デスティニー・クロス

笛吹水仙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デステイニー・クロス

【Nコード】

N4080Y

【作者名】

笛吹水仙

【あらすじ】

この世界の名はユーレント。今この世界には人知れず災厄が迫っている。そんなことは露知らず、今日もまた新たな運命が交差する…？数々の力有る“モノ”達の運命が交差し…！？どうなっていくのやら…

笛吹水仙、第一作

第一話・厄日…？（前書き）

いやぁ…ミスった…

ちょっとした間違いを訂正するつもりが元を消してしまいました…

（苦笑）

気を取り直してどうぞ…！！

第一話：厄日…？

この世界、ユーレントは、多くの大陸、国が存在し貧富の差が激しく戦争の多い世界だった。「だった」と言っただよに過去の話だ。今は、貧富の差も戦争も昔程ではなくなっている。その理由を語る前に、何故、戦争が多く、貧富の差が激しかったのかについて説明しよう。ユーレントには、人間が現れる以前より、魔物という凶暴凶悪な生物が存在していた。いや…凶暴凶悪は、誤りかも知れない。中には、人間に一切関与しないもの、共存を選ぶモノも存在したのだから…だが、ほとんどの魔物は人間に対して攻撃的であるため、生活必需品から、武器等を作るための素材集めが非常に困難であった。そのため、戦う力を持つ者が少ない国と多い国に貧富の差が見られるところが多くなり、大国は、より多くの利益を得ようと他国に侵略し、戦争が勃発しだした。この当時は、戦うのは、兵士だけ、それが当然の事だという考えがあり、兵士でない者達は、戦うという選択をしなかった。そして、この考えが変わり、兵士でない者達が戦うという選択肢を選んだことにより、戦う術が徐々に増え、貧しい国が減り、余裕が出来たことにより、国同士が争うことが少なくなり、それなりに平和な世界になったのだ。この変化は、運命だったのだ…来たるべき災厄に立ち向かうための…。ここまで、長々と語った後では、あるが、私について話そう…と言っても、私は有であり無、つまり、とても不安定で不完全な存在であるため話せる事などほとんど無いが…そんな私に出来ることは、この世界を見守り、この世界について語ることだけ…そう、たったそれだけなのだ…

木々が生い茂る、エルダリア大森林に短い金髪を跳ねさせ、紅の瞳をした1人の少年がいた。

1人寂しく16度目の誕生日を祝っている気分的に落ち込んでいる俺。と言つても主な理由は先程まで見ていた夢が原因である。(何で今更、あの日のことを…)。私…私…私は…私は、貴様を許さんぞ、レオン・エミリオン…いつか必ず報いを受けさせてやる…覚えていろ!!)…。夢に出てきた少女の言葉が、俺の寝起きのテンションを急降下させていた。そして…

「グオオオオオ!!」

「!?ちっ!何だつてんだよ!!」

突如、森林を揺るがす程の雄叫びが上がった。そして、その音源は近くにいます。俺は、鞘から刀を抜き臨戦態勢に入った。その時「グラア!!」

木々を薙ぎ倒し巨大な銀色の毛を逆立てたウルフマン(二足歩行の人語を話す狼、大きさは通常、身長2m、体重は約100kgだが、今回は3mは越えているように思われる。ちなみに体毛の色は住んでる場所により異なる。見た目は完全に狼)が姿を現した。

「たく…今日は厄日かよっ!!」

話を通じる雰囲気でない以上やるしかない…。俺はそう判断して一気に攻勢に出た。

「幻狼斬!!」

幼き日に師から習った最初の技…己の闘気を狼の形として具現化してその爪と牙で相手を切り裂く技を放つ。咄嗟に己の爪で受

けるウルフマン。爪ごと切り裂く自信が俺にはあった。しかし…

「グレアー!!」

「なっ!?!」

多くの魔物を切り裂いてきた俺の技はウルフマンによって容易く消し飛ばされてしまった。技を消し飛ばした勢いそのまま俺に迫る鋭利な爪。

「ちっ!!!」

咄嗟に刀で防ぐ、が衝撃は殺しきれず、吹き飛ばされる。

「グレアー!!」

吹き飛んだ俺を追撃するべく飛びかかってくるウルフマン。

「調子に乗んな!」

「グルツ!?!」

炎を纏った蹴り、紅蓮脚を人狼の顔面に喰らわせてやる。よろけるウルフマン、追撃とばかりに刀を振り下ろす……が、

「ガアアア!!」

「なっ!?!」

今までの動きとは段違いの速さで爪が閃き、俺の刀は宙を舞っていた。

「……………」

「これは中々にピンチ……だな」

咄嗟に後ろに跳んで距離を取った俺だが、刀は運の悪いことにウルフマンの近く、正直、丸腰ではまるで歯が立たない。命の危機を改めて感じ、嫌な汗が止まらない。

「……………」

「……………」

ウルフマンが無言のまま姿勢を低くした。(来るか…)と同じく無言のまま俺は身体を強ばらせた……が、ウルフマンはそのまま凄まじい速度で何処かへ走り去ってしまった。

「……助かったあー」

緊張から解放され体から力が抜けて倒れ込む俺。(何で退いてく

れたのかはわからんが…とにかく命拾いしたなあ…さてと、これ以上、厄介な目にあわないためにも街に急ぐとするか！)て1人頭の中で語り俺は刀を鞘に納めて歩き出した。

「シオン、無闇に人を殺そうとしたらダメだよ？」

笛を持った小さな女の子が“シオン”に寄りかかりながら話しかける。

「グル…」

申し訳なさそうに身を小さくして女の子の体を支える巨大なウルフマン、シオン。

「反省してるならいいの…次からは気をつけてね？貴方は誰よりも強い。そして、優しいことが私の誇りなんだから」

「ガルツ」

女の子の言葉に嬉しそうに返事をするシオン。

「さ、そろそろ帰ろ？みんな心配してるかもだし…」

「ガオツ！」

女の子の言葉を聞き、己の背に女の子を乗せるとシオンは短く吠えると女の子に恐怖を与えない程度の速度で駆け出した。

「それにしても…あの人がごかつたなあ…本気じゃなかったと言っても、私のシオンとあそこまで戦えるなんて…思わず笛でシオンを落ち着かせるのを忘れちゃった」

「グル？」

「シオンは思わなかった？あの人強いなあ…って」

「ガルッ！」

「そっか シオンも思ったんだ 私より少し年上みたいだったけど…また、会えないかなあ…」

「???」

女の子の言葉に？マークを浮かべるシオン。

「あ、気にしないで？ただ、何となくまた会いたくなって思っただけだから…」

「ガル、ウォーン」

「え？…ありがとう、シオン」

女の子とシオンが何を話していたのか、それは当人達しか知らないことであった。

「それにしても…戦いの途中、綺麗な笛の音が聞こえたような…？」
今更、笛の音について考えているレオンであった。

第一話・厄日…？（後書き）

誤字・脱字の指摘、どうぞよろしくお願いします…

第二話・ギルド（前書き）

戦闘描写…うまくできたかなあ…

と、不安ですがどうぞ…！

第二話：ギルド

この世界ユーレントには、多くの国が存在する…が実際には2つしか存在しないに等しい。その理由は、その2つの国、バルモジアとジブランドルの軍事力が古より強大でその影響が今も存在し、ほとんどの国がこの2ヶ国に属しているからだ。そして、バルモジアとそこに属する国々は帝国、ジブランドルとそこに属する国々は王国と呼ばれている。この両国の間では今も武力による衝突が起きており、その他にも内乱、紛争等も昔よりはその数を減らしてはいるものの、絶えないのであった……”ユーレント史”より

俺、レオン・エミリオンは、今、ギルド（国に国民それぞれが持っている権利を返上し己自身で生きていく者の集まり）によって支えられる村、ナノハナの酒場で遅めの昼食を取っていた。

「ふう…ようやく一息つけたぜ…」

強力なウルフマンに襲われ、生死を賭けた戦闘のおかげで道に迷う羽目になりつい先程、やっとのことで森を抜けたのだ。

「だいぶお疲れのようですね、お客さん」

優しい表情をした壮年の店主が声をかけてきた。

「ああ…異常なくらい強いウルフマンに襲われたからなあ…」

そう愚痴をこぼす俺に「それは、お気の毒です…」と苦笑を浮か

べる店主。とにかく、今の平穏な時間を謳歌しようと考えていると…

「おい！！誰か戦える奴はいないか！？人手が足りないんだ！！」

そう大声で言いながら大剣を持った男が店に入ってきた。その男の言葉に反応して武器を持っていた者のほとんど…いや、全員が立ち上がり酒場を後にしていった。そして、一般の客は何事もなかったように食事等に戻っていった。

「何だっただんだ…？」

訳がわからない俺がそう呟くと、

「ん？…ああ…そうでした、お客さんは旅の方でしたね？こういったギルドに属する村や街では日常茶飯事の魔物か余所のギルドからの襲撃ですよ。心配なさらずとも、この村のギルドの方々は強いので大丈夫ですよ」

笑顔を浮かべて随分と物騒なことをさらつと言う店主。

「守られるってのは性にあわないし…食後の運動も兼ねて俺も参加して来るわ。このメシは中々うまかったぜおっさん」

そう店主に言って代金を払い、俺は酒場を後にした。

「派手にやってるなあ…」

酒場を出てすぐに目に入ったのはぶつかり合う戦士達だった。先程、酒場から出て行った者達を含めて多くのこの村の戦士達が肩にドクロの刺青をした暗殺者のような対峙していた。（肩にドクロ…そういや、そんな殺しを請け負うギルドがあるとか誰かが言っていた

なあ…）とか1人考えに耽っていると、目の前に刃が迫っていた。

「おっと…」

頭を相手のリーチの外に出して避け、カウンターに右拳をくれてやる。

「ぐっ!？」

呻いて崩れる男。(まずは、1人…)

「人のささやかな休息を台無しにしてくれたんだ…覚悟は出来てるよな？」

俺が静かに、しかし、視界に捉えている暗殺者達に聞こえる声量でそう言うと、3人の暗殺者達が向かってきた。それぞれの的確に急所を狙い剣を突き出す。俺は、すぐさま刀を抜き、

「遅いんだよ!!!」

連牙斬(複数の斬撃を闘気により具現化して放つ技)を放つ。「

「ッツ!？」

まともに喰らい、声もなく倒れる暗殺者達。(手応えねえな…数で攻めて来てるのか?)そう疑問に思っていると…。

「おめえ、やるじゃねえか」声がした方を見ると、この村の戦士と思われる2人が倒れており、3人の戦士に囲まれた状態でこちらを見ている肩にドクロの刺青をしている男がいた。ボサボサの緑の短髪、瞳孔が常に開いてるんじゃない?と思われるほどに大きい金色の瞳、服は体に張り付くスーツに腰にはジャケットを巻き付け、所々に裂け目のあるズボンを着た男。その男は、他の暗殺者のように武器を持っておらず、隠している様子もない。(暗殺者集団の幹部か…?)考えていると…

「俺の名はグリム、ギルド“ファントム”ドクロ衆の幹部の1人…だ!!!」

己の正体について語ると同時にグリムは跳躍した。

「ノロマ共があ!!!喰らいなあ!!!」

グリムの叫びに呼応するように腰に巻いていたジャケットの腕の部分から大量のオクトパス(持ち主の意志通りに動く鞭の先に刃が

付いた左右4本ずつ計8本の触手状の暗器）が現れ、3人の戦士達を襲う。

「ぐうああー!?!」

「ぬあー!?!」

「!?!」

2人は両腕両脚を貫かれ悶絶し、1人は頭を貫かれ叫ぶ間もなく絶命した。

「さて…おめえはどんな声で啼いてくれるんだあー?!」

叫びながらオクトパスを動かすグリム。

「お前のいかれた趣味に付き合うつもりはないんだよ!?!」

俺は、怒声と共に連牙斬を放ちオクトパスを弾き、グリムに向かって駆け出した。

「吹き飛ばえ!?!」

気合いの一声を刀に乗せ振り切り、炎狼戦吼（闘気と己の炎の魔力を刀に込め、振り抜くことで凄まじい衝撃と炎を生む技）をオクトパスにぶつける。ドーンッ!?!

「なっ!?!」

オクトパスを残らず吹き飛ばされ驚愕の表情を浮かべるグリム。

隙だらけのその顔に右ストレートを叩き込む。

「ぐあ!?!」

もろに喰らい倒れたグリムに、

「俺はお前を殺さない…が、この村の人達はどうか知らないぜ…!」

そう言い捨てる俺にグリムは何かを言おうと口を開いた時…

…ザシュ!?!

「!?!」

グリムの後ろから伸びてきたバイソン（先に刃の付いた鞭、オクトパスの原点とも言える武器）がグリムの頭を貫き、その命を奪った。バイソンが伸びてきた方に目をやると、ツンツンに逆立った黒髪、開いているかわからない細目の少年が腕にバイソンを巻き付けて民家の屋根の上に座っており、その横には黒髪のショートカット、

感情が余り伺えない藍色の瞳の少女が立っていた。2人は少年がバ
イソンを自分の手元に戻すと同時に去っていた。(あの2人…何時
からいたんだ…?)やるせなさ疑問を残したまま、暗殺者の残党
狩りに向かった。

「ファントム”の幹部って全員あんなに弱いのかねえ〜?」

先程の少年が隣の少女に問う。

「私に聞かれても…“ファントム”のことなんて殆ど知らないし…」
少し困ったようにそう返す少女に「だよなあ…」と少年は呟き、

「まあ、楽しく殺っていくさ〜」

物騒な言葉を紡ぎ、少女はまたもや困った顔になり無言のまま2
人は何処かへ疾走した。

全ての暗殺者を倒し、捕らえ終えた頃には日が暮れてしまってい

た。

「数だけはバカみたいに多かつたなあ……」

「まあ、数だけでこつちの死人は幹部を名乗った奴にやられた1人だけだから、被害としてはマシな方だな……」

「ああ……ロンの奴、死んじまいやがったんだな……」

「暗くなっても仕方ないだろ、弔いも兼ねて祭を開こう……ロンの奴も祭が好きだったんだから……」

「そうだな……よし！おーい、そこの手伝ってくれた旅の人、あんたも祭に参加しないかー？」

各々が今回の戦いについて語り、グリムに殺されたロンという男の弔いも兼ねた祭を開こうということにした村の戦士達。その戦士の1人が昼までは、全く関わりのなかつた俺にも声をかけてくれた。お互いに死人は1人ずつの戦いだった。俺が血生臭い空気に気分を悪くした俺は、このまま旅を続けるのもどうかと思ひ、ありがたくその誘いに乗らせてもらった。

「我等の戦友、ロン・メドンの冥福を祈ると共に、今日の多くの者の生還を喜び宴を開催する……！」

村長（驚いたことに酒場の店主）の言葉により、昼間からの血生臭い空気をなかつたものにするかのように盛大な祭が開催されたのだった……

第二話：ギルド（後書き）

どうでしたか？えっと、誤字・脱字、ここはこうした方が…といった指摘、感想等々、ありましたら、送ってくださいm┆┆┆m

第三話・討伐部隊！・様々な出会い…前編（前書き）

少々描き直しました…

血が舞うシーンがあります。苦手な方はお気をつけて…

第三話：討伐部隊！！様々な出会い…前編

“ファントム”とは、世界に悪名を轟かせる巨大な犯罪ギルドである。“ファントム”は、戦争の傭兵を主に請け負うギルバート率いる“コフィン”の部隊と、暗殺を主に請け負うシャルル率いる“ドクロ”の部隊の2つからなる。この2名の名前と性別、武器しかわかっていない、大規模ながら謎多きギルドである。ちなみに、ギルバートは、紫色の長髪と碧眼が印象的な優男、武器は大剣。シャルルは、長いストレートの白髪、威圧的な黄金の瞳に、厳つい顔に合った威厳のある顎髭が特徴的な大男で、武器はこれまた巨大な大斧。どちらも超S級の賞金首であり……危険なギルドの一部より〜

「ここか…」

俺、レオン・エミリオンはある建物の前で立ち止まった。横の看板に“ファントム討伐部隊集合所”と書いてあるのを見て確認して俺は扉を開いた。

そこには、俺を含めて11人の男女がいた。

1人は、ハンマーを背負った厳つい顔のドワーフ（人間より背丈が低くがっしりした体つき頑丈な種族）の老齢の男。

1人は、レイピアを提げた綺麗な翠の髪をしたハーフエルフ（人

間とエルフのハーフ、人間と同じような体格で美形が多く、寿命は人間よりもかなり長い。魔法が得意な種族）の美形の男。

1人は、杖を持った青髪の人間の少年。

1人は、様々な種類の杖を背負った顔を隠す様にスカーフを巻いた者。 1人は、片手に杖、片手に書を持った明るい赤髪が印象的な人間の美少女。

1人は、大剣を背負ったキツイ顔付きのピンク色の髪で隻眼の人間の女性。

1人は、短銃を4丁腰に提げ、長銃を1丁背負ったピンク色の髪の無表情な人間の少女。

1人は、ランスと盾を背負った金髪の人間の青年。

1人は、剣を携えた他とは比べモノにならない威圧感を持った銀髪の顔に戦闘の傷を色濃く残した人間の男。

1人は、異様な空気を纏った鎖のついた巨大な鎌を4本背負った、長い黒髪と狂気を秘めた紫色の瞳が印象的な人間の青年。

ここにいる誰か1人を除いた者達が俺が請け負った依頼。“ファントム討伐”の参加者だ。俺が入って、周りを見回していると、依頼者らしき威圧感を放っている白髪の男が床を鞘で叩いた。

「全員が揃った様なので指示を出させてもらう」

威圧感を大いに含んだ言葉は更に続く、

「まず、君達にはこの紙に書かれた箇所から目標の捕獲、もしくは殲滅を行ってもらおう。殲滅も帝国騎士団の団長殿より許可を得ている。なので、その時は一切の遠慮はいらない：わかったな？目標は29名の“ファントム”のコフィン部隊だ。幹部クラスはニコライ、マツチ、シアの三名を確認した。油断をせず確実にこなしてほしい。話は以上だ」

俺を含めてこの場の10名が何を聞いても無駄と判断を下し、それぞれ紙を受け取り、それぞれ紙に記された場所へと移動した。

「やあ、同じ地点から行動を開始するようだね。あ、名乗るのを忘れていた。私の名はウエルター。君の名は？」

金髪のランスと盾を背負った青年ウエルターが俺に名を聞いてきた。

「俺は、レオン。レオン・エミリオンだ」

簡潔に答えながら俺は小さな男の子との約束を思い出していた。

-
-
-

俺がギルドの街、カルトラで依頼板（依頼の内容、報酬額等が書いてある紙が貼られている板）を見ていると…

「あの…」

「ん？」

声が出た方を見ると10にも満たないであろう幼い男の子がこちらを見つめていた。男の子は口を開き、

「お兄ちゃん…剣持ってるけど…強いのか？」

「剣…？これは刀だ。後、俺が強いかはわからん。何を持って強い、弱いと決めるかわからんかな…と、それより、俺に何か用か？」

男の子の間違いを訂正しながらそう問うと、

「ニコライって奴を殺してほしいの…ボクのお父さんをお母さんを

妹を殺した…あの男を!!」

男の子の声には痛々しい負の感情が溢れんばかりに籠もっていた。家族を理不尽な暴力によって奪われた男の子のその殺意は仕方のないものだろう…俺はそう思った。そして、それと同時にその願いを聞き入れようと思った。

人の命を無闇に奪う輩への怒りと男の子の負の念を感じたことが俺に男の子の願いを聞き入れさせたのだ……

「そろそろ突入の時間だな…一つ言っておく、ニコライは俺が殺る。邪魔はしないことを勧める」

俺の殺気を孕んだ言葉にたじろぎながらウエルターは「わかった」と頷いた。ウウー！突入を告げる音を聞き俺とウエルターは無言のまま“ファントム”の者達が待つアジトへと疾走した……

「Aルート」

「はっ！！」

「ぐぎゃっ！？」

ピンク色の髪で隻眼の女性、ラリラナは敵一人の命を大剣の一撃で絶ち、

「……………」

「ぐあっ！？」

「ぎゃ！？」

ピンク色の髪を銃を持った少女、ラリアナは無言のまま引き金を引き2人の命を奪う。ピンク色の髪が特徴的な姉妹コンビは着々と敵を倒し進んでいた。情報よりも数を増やしている“ファントム”のコフィン部隊の数を減らしながら…

「Bルート」

「ふんっ！！」

「！？！？」

ドワーフの老人、ダイトンのハンマーが敵を叫ぶ間もなく叩き潰し、

「そこっ！！」

「っ！？」

ハーフェルフの青年、アルフィンのレイピアが的確に敵の急所を刺し貫く。こちらの即席コンビも着実に敵の数を減らしながら奥へ奥へと進んでいた…

くDルート

「フレイルムランス」

炎の上級魔法フレイルムランス（炎の巨大な槍を敵にぶつける。ぶつかると同時に爆発する魔法）を静かに詠唱破棄で放ち2人の敵を灰に変えた様々な杖を背負っているスカーフで顔を覆った男、ハイネ。

「雷よ…ライトニング!!」

「ぬぁ!?!」

雷の下級魔法ライトニング（一筋の雷を敵に落とす魔法）を放ち敵1人の意識を奪った青髪の人間の少年、ジョシー。師弟関係にある2人もまたA、Bルートの者達と同様に敵の数を減らしながら奥へと歩んでいた…

くDルート

「氷よ!」

たった一言の言の葉で氷の上級魔法のアイシクルランサー（氷の騎馬隊を召喚し敵にぶつける魔法）を放ち5人の敵を吹き飛ばした片手に杖、片手に書を持った明るい赤髪の人間の少女、リアナ。

彼女は1人で奥へと向かっていた…

「Eルート」

「ククク…ア、ハーハツハ」

両手に柄に鎖が付いた巨大な鎌を持ち、背に同じ鎌を日本背負った黒い長髪、狂気を秘めた紫色の瞳を持つ男、ヤイバが“ファントム”のコフィン部隊の者達であつた10の肉塊の中心で笑つていた。多くの骸を築いたその鎌にも身体にも大量の血を付着させ、その血の臭気に咽ぶことなくヤイバは笑つていた…

「Fルート」

「そらよ!!!」

「うぎやつ!?!」

ウエルターのランスの一突きで情けない声を上げ倒れる敵、

「もーっ!!!」

「ぬあっ!?!」

巨大な盾をもろにぶつけられ吹き飛ぶ敵、

「……………」

それを横目で確認しながら俺は一つの技を放った。

「……………うおおおお!!!」

4人の敵が雄叫びを上げながら向かってくるが、俺も、俺の技が見えていたのであろうウエルターも敵を無視して先へと進む。そして……ザン!!!という音と同時に4人は固まり、音を立てて倒れ伏し、その身体から炎を上げ絶命した。

俺の放った瞬炎（炎の気を纏った居合いの技）の熱気を背に受けながら俺とウエルターは先へと進んだ。

暫く進むと、道が二手に別れていた。

「レオン君、ここで一旦お別れだ。必ず生きてまた会おう」

「ああ、次は依頼を果たした後だ」

このアジトに居る“ファントム”のメンバー全ての捕縛、或いは殲滅という依頼を果たすべく別れ道があった場合は別れて進むのが原則の様な状態の中、俺は右の、ウエルターは左の道を選び一時の別れの言葉を交わし、俺は右の道へと歩みを進めた。

その同時刻にA、B、Cルートの方々も別れ道に差し掛かりそれぞれが別の道へと進んでいた。

こうして、討伐部隊の方々は、10人がそれぞれ一つの道を進むのであった…

（ウエルタールート）

敵に出会うことなく“ファントム”の1アジトの道を進むウエルター。

その前から、リン、リンと鈴の音を鳴らしながらオレンジ色の長髪を揺らしながら、目を閉じた少女が近付いてきた。その手にレオンの物より短い刀、脇差しを持っていてと周りの異様な空気を感じたウエルターはすぐさま臨戦態勢に入った――が、その時にはもう遅かった。気付いた時には目の前に少女の顔があり、開かれた緋色の右目には自分の姿が映り、そして、次の瞬間には意識が永遠の闇へと落ちていた。

少女、シアの一太刀により頭を斬り跳ばされ血飛沫を上げ倒れたウエルターだった肉塊。返り血を気にせずシアはその場を去っていた。

先程交わされた再会を誓う言葉は無情にも打ち砕かれたのだった

――

「ハイネルート」

「…ファイヤーマウンテン」

詠唱破棄で放たれる炎の上級魔法ファイヤーマウンテン（その名の通り炎の山を創り出し、その中に敵を閉じ込め爆発する魔法）その中には一つの影があった。

「消える」

その一言と共に、爆発する炎の山。影の姿も消え、跡形もなくなつたかと思われた、が…

「そんなだけか…？もう、飽きた…そろそろ喰うぜ？」

「っ！？」

声がるや否や爆炎から腕が伸びハイネの首をつかみ宙吊りにする。

爆炎が消え、声の主の姿が現れハイネは絶句する。その身体にはハイネが放つた三つの魔法による傷の後などなかったからだ。現れたその声の主、ギルバートからの連絡を伝えにきた“ファントム”コフィン部隊の幹部バノツサ、細身だがその身体に常軌を逸した力を秘めた男。オールバックの黒髪の乱れを左手で直しながら徐々に右手に力を込めていく、ハイネの顔が苦悶に歪み、そして…

「じゃあな」

ゴキッ！？不快な音を立て首の骨とハイネの命を砕いた。

「さて…ニコライの野郎はどこにいるんだ…？」

と誰に問うでもなく呟きハイネの骸の下から去っていった…

「ヤイバルト」

「くたばれや!!」

殺意の籠もった言葉と共に屈強な角刈りの大男、マツチは大剣を振り下ろした。

「おっと」

それを軽く避け反撃にと右手の鎌を振り下ろすヤイバ。

その鎌を左手でつかみ、ヤイバの手から奪い投げ飛ばすと同時に右手に持った大剣の重い一撃で左手の鎌も吹き飛ばされ、すぐさま背中の二本を抜き構えるヤイバ……が、

「力が足りねえんだよ!!」

その言葉と共に振り上げられた大剣により、最後の二本まで弾かれたヤイバ、しかし、表情は終始変わらず狂気を秘めた笑顔のまま、その手に鎌がなくなった時でさえ……

マツチは、それを一切気にすることなく、

「シネー!!」

勢いよく大剣を振り下ろした……ザシユ!!音と共に血飛沫が上がり辺りが血に染まり臭気が充満する。そんな中、

「ククク……いい香りだ……クク、ア、ハーハツハハ」

ヤイバが血に濡れながら笑っていた。手には4つの鎌が上手く組み合わさって巨大な手裏剣になった血まみれの武器を持って首が転がり、身体は無様に倒れ血飛沫を上げるマツチの骸の前で長々と笑っていた……

10人の内、2人を失いながらも敵の要の1人を破り討伐部隊は

進んで行く

第三話：討伐部隊！～様々な出会い～前編（後書き）

どうでしたか？感想等お待ちしております…

第四話・討伐部隊！・様々な出会い…後編（前書き）

短いかな…？

楽しんでもらえると思います

第四話：討伐部隊！！様々な出会い…後編

“ファントム”のコフィン部隊は、傭兵の仕事を主にしていると
いうのに何故、暗殺を請け負うドクロ部隊と同じ様に指名手配され
ているのか気になったことはないだろうか？

その理由は簡単なこと、ドクロ部隊とコフィン部隊は2つの部隊
で“ファントム”だからだ、そのため、コフィン部隊にもドクロ部
隊にも依頼をしているのは犯罪者なのである。

さて………“ファントム”についての一部より…

レオンルート…

俺は、ウェルターと別れた後、道の先へと疾走していた。誰より
も速くニコライの下に辿り着くために……

暫く走ると大きな部屋に辿り着いた。そこには……

「よお、お前が侵入者の1人か？」

部屋の中央にあるイスに偉そうに座っている銀髪角刈り、人を見
下したような藍色の瞳の紫の鎧を纏った男がそう問い掛けてきた。

俺は、その問いには答えず無言のまま刀を抜き放ち、

「お前がニコライか…？」

切っ先と殺意を向けて問いかける。

「おいおい…質問しているのは俺様だぜ？確かに俺様がニコライ様

だが：お前は誰だ？あー：やっぱ、いいや、どうせ……」

ベラベラ喋っている男、ニコライ。しかし、俺は話を聞くつもりなど毛頭ない。一気に距離を詰め刀を振り下ろし、綺麗にイスを両断する。

「お前は何故、無関係の人を殺せる！？」

叫ぶと同時に俺は振り向きながら刀を振るう。

「何故？簡単なことだ、楽しいからさ。逆に問うぜ、お前は何故関係のない奴を切れる？その刀から臭ってくる血の匂い俺の部下の血だろ？そいつらもお前にとっては関係のない人間達だぜ？」

俺の刀を空間魔法の類で召喚した右手の刀で受け、左手の刀で斬り付けながら問い返してくるニコライ、

「俺がお前等を斬る理由：それは、お前等が俺の怒りに触れたからだ！」

そう怒鳴り迫り来る刀を炎を纏った拳で弾いた。正確には俺の貫く正義に反したからなのだが、これから斬る相手にそこまで教えるつもりなど俺にはなかった。

「はっ！そうかよ、だがな、俺様に斬られるお前が俺様を斬ることは出来ないんだよ！！」

言葉と同時に激しさを増す剣戟、少しずつ俺は壁際へと追い詰められていった。そして

「終わりだあ！！」

迫り来る二つの刃：

「お前がな！！」

振り下ろされる二刀にタイミングを合わせて放った爆竜閃（炎狼戦吼を上回る破壊力を持った武器破壊技、当たると凄まじい爆発を起こす）が二本の刀と頑丈そうな鎧を破壊し、ニコライを吹き飛ばす。

「がはっ！？バ、バカな…この俺様がこんなガキに…」

上体を両腕で支え起こしながら、そんなことを言っているニコライにゆっくりと近付きながら…

「お前の敗因は、俺を甘く見たことと…何より、俺を怒らせたことだ」

刀をゆっくりとニコライの眼前に持つていく…

「ま、待つてくれ！俺様が悪かった！もう二度と」

ニコライの言葉はそれ以上続くことはなかった。俺ではない、第三者の手により強制的に閉ざされたからだ。首を刈り取られ血飛沫を上げながら倒れるニコライの首を失った骸。

「命ごいとは実に情けない…おっと、失礼、横取りするつもりはなかったのですが余りにも見苦しかったものでつい…」

と、血に塗れながら刈り取ったニコライの首ともう1人見知らぬ男の首を持ったヤイバが頭を下げてきた。武器である鎌は全て背負っている。そう、素手でニコライの首を刈り取ったのだ。

怒りとニコライの首を刈り終えるその時まで接近に気付けなかったことに対する驚きで何も言えずにいると続々と“ファントム”の討伐部隊の面々が集まってきた。

その中にウエルターとハイネの姿が見当たらないことにヤイバを除いた全員が疑問に思っている…

「おいおい…マツチもニコライも死んじまってんのかよ…」

全員が視線を向けた先にその男はいた。オールバックの黒髪、細身ながら引き締まった体付きの男、バノツサ。

「ああ…ボスからの言伝を死体に伝えても無駄だし…俺は帰る。戦っても勝ち目無さそうだしな…一つだけ忠告してやる。これ以上“ファントム”に関わるな、ランス使いや魔法使いのように早死にしたくなければな」

そう言い残してバノツサを闇の中へと消えていった。

「そんな…師匠が…くう、うう…」

師を失い泣き崩れるジョシーの横で俺は、

「ウエルター…」

もう1人の故人に思いを馳せていた…

「……確かにニコライ、マツチの首と確認出来た。依頼達成だ、ご苦労」

依頼者であるザッドから報酬を受け取り、皆それぞれの道を目指して歩き始めた。

俺もそれに習い立ち去ろうとした時、

「ねえ、君は何のために旅をしているの？」

と杖を背負い本を抱いた少女、リアナに声をかけられた。

「何のためにか……」

無視しても良かったのだがふと考えてみると自分自身、何故旅をしているのが浮かんでこなかった。

だから俺は、

「理由はない。ただ、色んな場所に行きたいだけだ」

深く考えず実直にそう答え先に進もうとすると……

「ふむふむ……ねえ、私もその宛てのない旅について行っていいかな？」

「……は？」

予想外の発言に思わず足を止め振り返ってしまふ。

「私もね、目的地とか決まってる人……探してる人がいて色んなところを旅してるの。だけどね、今回の軍資金を稼ぐための戦いで分かったの……1人じゃ命が危ないって……だから、ニコライっていう幹部を追い詰めた君とパーティを組めたらなって思ってたの。あ、目的地がある旅なら考えたんだけどね……で、どうかな？私と組

んでくれないかな？」

「まさかパーティーを組まないかと言われるとはつくづく予想外だなと思いつつ、」

「ああ、いいぜ。これからよろしくな！リアナ！」

右手を出し握手を求める、

「いきなり、呼び捨てなんだ…ま、いいけどね…よろしくね！レオン！」

笑顔を浮かべその手を握るリアナ。

俺は仲間を得てギルドの街カルトラを後にした……

第四話：討伐部隊！～様々な出会い～後編（後書き）

次話は魔物と対決です！

あ、感想等お待ちしておりますm（）（）m

第五話：レオン&リアナVS魔物軍団！？（前書き）

少々最後を修正しましたm（
）m

第五話：レオン&リアナVS魔物軍団！？

近頃、謎が多かった“ファントム”の情報が入ってくる。おそらく、先日の“ファントム”コフィン部隊幹部ニコライのアジトをギルドの者達が抑えたことにより、帝国ばかりに手柄を渡してたまるものかと王国が奮起し、更に帝国は手柄を上げようと積極的に行動を開始したからだろう。

さて、それはさて置き……帝都広報部の一部より

俺は、リアナを仲間に加えた後、2人で話し合い、次の目的地を職人の街ボルテノールと定め、その途中にある名も無き森の中を進んでいた。

「ねえ、レオン。そろそろ一度休憩しない？」

「ん？ああ…そうだな…よし、じゃあメシにすつか」

リアナの言葉により、そろそろ昼になることに気付き、安全にメシにありつくためにリアナに魔除けの结界を張ってもらう。そんな中で悠々と俺の手作りカレーを頬張りながら、

「まさか、レオンが料理上手だなんて…思わなかったよ」

「自分で作る機会が多かったからな…そういうリアナはカレーさえ作れないんだな…」

そういった憐れみの目で見てるがリアナはどこ吹く風で食べ続け

ていた。

「ふう…さて、そろそろ先に進むか？」

カレーを食べ終え少しした頃に俺がそう尋ねると立ち上がり頷くリアナ。

「よし…」

「グラアアアア！！」

俺の言葉を遮り響く奇声、俺もリアナも瞬時に戦闘態勢に入る。

そこに姿を現したのは二種類の100の魔物、コンゴウ（大きさは人間の大人程度、知能が高く集団で暮らしているサルのような見た目をしている魔物）とスペクター（こちらも人間の大人程度の大きさ、ただ脚がなく纏っているマントの下に中身を感じさせない赤い目を持つ魔法が得意な魔物）。

「かなりの数だな…スペクターの方は任せていいか？」

そう軽く言う俺に少々驚きの表情を浮かべたリアナは戸惑いながらも、

「戦う気なの？…わかった、コンゴウは任せるよ？」

と言い、スペクターの方を見やる。

「いくぞ！！」

「炎よ！！」

俺の気合いの一言と同時に炎の上級魔法イフリートソード（炎で出来た剣を持つ炎の魔神を召還し攻撃させる魔法）をリアナが放ちスペクター5体を灰に換える。

そのことに驚いているコンゴウ達に向けて疾走していた俺は既に距離を詰めて刀を抜く、

「グラッ！！？」

1体を斬り裂き、そのままの勢いで近くのコンゴウの頭を跳ねる。コンゴウの血が舞うのを気にせず1体1体斬り伏せていく…

「片付いたか…？」

あらかた斬り伏せてリアナの方を見ると、

「風よ！！」

風の上級魔法ウィンドファンク（鋭利な爪の形をした風を召還して敵を攻撃する魔法）で残りのスペクターを片付けたところだった。（終わったな…）と思ったその時、

「……」

異様な気を放つ人間の影のような者が現れた。

気配から察するには魔物の様だ。さらに……

「……グリアアアア！！！！」

コンゴウの群がまたもや現れたのだ。逃げ場はない…

「リアナ！コンゴウは任せたからな！！」

返事を待たずに俺はシャドー（仮）との距離を一気に詰め刀を振り下ろす。

シャドーは己の右腕を刀の形に変えその腕で受け止める。止められると同時に俺は左拳をシャドーの鳩尾に叩き込む。

しかし、怯むことなくシャドーは左手を槍に変え突きを放つてくる。

「ちっ！！」

右手の刀で槍を弾き一度距離をとる。

間合いを計りながらお互いにゆっくりと距離を変化させていく…

「……」

シャドーが一気に距離を詰め左手を突き出してくる。

両手で握った刀でその攻撃の軌道を逸らし間合いを詰め刀の形をした腕の攻撃を距離を詰めることによって防ぐ。そして…

「おらっ！！！！」

下段からの斬撃、それは確かにシャドーを捉えていた。だが…

「……」

「なっ！！？」

シャドーの体から第三の腕が現れ半ばまで刃を受け入れながらも

人ならば致命傷になる攻撃を防ぐ、そして…

驚きの余り隙を見せてしまった俺に無情の刃が振り下ろされ…

「光よ…」

光の束がシャドーに直撃し吹き飛ばす。

リアナの光の中級魔法、レイ（光のレーザーを放つ魔法）により命拾いした俺は油断した自分を叱咤し、リアナの方を向く、

「悪い、助かった」

「全く油断し過ぎ。こっちは終わったからアイツをさくつと片付けよ…！」

「ああ！」

その言葉を交わし、シャドーの方に意識を集中する。

「……」

相変わらず声を出すことなくゆらりと立ち上がるシャドー。

「喰らいな！！」

怒声を乗せた疾風脚（風の力を借り凄まじい速さでの速度を利用をした蹴りを放つ技。レオンの場合は炎の力で爆発を起こし、その爆風を利用して放っている）をシャドーの胴体に叩き込む。

「更なる光よ！」

光の上級魔法のグランドレイ（光の中級魔法レイの強化版の魔法）を放つリアナ。「……」

よろめきながらも最初からあった両の手を巨大な盾に変えグランドレイを受けきるシャドー。

しかし、それが決定的な隙になった

無言のままにただ最大の闘気を込め研ぎ澄まされた一撃を放ち、シャドーの体を両断する。

「ギギイ……ミ、ゴ…ト」

初めて口を開き謎の言葉を残してシャドーの体は霧散した。

「終わったな…」

「中々、手強かったね…」

一気に脱力感に襲われながら、しかし、周りに気を張りながら座

り込んだ。

「少し休んでから進んでいいか…？」

「ええ…私も少し疲れたし…」

俺達は戦闘後のしばしの休息に入った。

く???く?

「あゝ、楽しかった。おっさんの式を倒すなんてねえ…」

ボサボサの黒髪、やる気のない黒縁のメガネの奥の黒い瞳、ユートレントでは珍しい黒い法衣を纏った黒づくめの青年が笑いながらレオンとリアナを視ていた。

「さて…と、充分楽しんだし、戻るとしますか！」

と独り呟き、

「これからも、おっさんを楽しませてちょうだいよ、少年少女…！」

不謹慎な言葉を残して先程レオンとリアナによって倒されたシャドーの様に霧散し、消えた……

第五話：レオン&リアナVS魔物軍団！？（後書き）

感想等お待ちしておりますm┐┌m

第六話・動き出した歯車（前書き）

戦闘描写少々あります！…！どござー！…！

第六話：動き出した齒車

魔法には、大きく分けて六つの属性が存在する。火、水、風、土、光、闇だ。とある隠れ里について書かれた書には、木、火、土、金、水の五つとされており、これらを五行と呼ぶそうだ。しかし、隠れ里について記載された書故に真実か否かの判断を迫られれば断絶否の意見が多いためここでは六つの火、水、風、土、光、闇で話を進めさせてもらおうと思う。まず、これらの属性に共通することはそれぞれ魔法を使用することの条件である精霊と契約を交わすということだ。まあ、しかし、契約とは名ばかりで対等な契約が結ばれるのは滅多にないことだ。大概は自分の都合の良いように無理矢理な契約を精霊に魔力により強制的に結ばせるのが一般的だが、高位な魔法使いになればなるほど契約者と精霊との関係は対等であることが多い。何故ならお互いに任意の上での契約であれば魔法の力をより大きく引き出すことが出来るからである。これと似たような原理で召喚術についても説明できるのだが、それについては、また次号ということだ…と話が逸れたが……魔法&召喚術の入門誌の一部より～

「ここが職人の街ボルテノールかあ……」

街中に広がる機械により発せられる熱に圧倒されながらボルテ

ルの南出入り口に佇む俺、レオンとリアナ。

「すごく暑いね…必要な物買ってすぐ出ようよ…」

リアナの力無い言葉に俺は頷き、保存食と傷薬を買おうべく万屋へと急いだ。

「これで全部揃ったな…」

万屋で必要な物を買った俺達は、言葉を交わすことなく街の北出入り口へと向かっていた…

「きゃー！ー！？」

「うわぁー！ー！？」

突然、多くの人々の叫び声が耳に刺さった。

「……行くぞ」

「言われなくてもそのつもりよ！」

その言葉を交わし緊張感を高めながら俺達は声が聞こえた方へと疾走していた……

「シヤア！ー！」

「ぐあっ！？」

仮面を付けた暗殺者然とした男がこの街に暮らしていたと考えられる男の喉笛をかき斬る瞬間が目の前に広がっていた。

「くそっ！！間に合わなかった…」

目の前で絶命した男と倒れている少女を見てそう毒づきながら刀を抜く、

「待って！あの女の子は、まだ息がある！気絶してるだけだから周りを巻き込む戦いは避けて！」

「わかった！女の子は任せませ！」

会話が終わると同時に仮面の暗殺者が殺気を放ちながらこちらに向かつてきた。

「シャツ!!」

「遅えよ!!」

迫り来るナイフの刃を刀の柄で弾き、隙だらけになった鳩尾へと左拳を叩き込む。

「ツ!?!」

声もなく倒れ行く仮面の暗殺者。

「対したことねえな…」

「そりゃ、そうだそいつはただの下っ端だからな!」

「っ!?!」

呟いた言葉に予想外の声が応えたことに驚き振り向くとそこには、倒れ伏すリアナと気絶した少女を抱える見知らぬ男。

深い青色の長髪、厭らしい笑みを湛えた水色の瞳、ノースリーブのジャケットを羽織り、両手に格闘家が着用するグローブをした紫色の縁のメガネをかけた男が立っていたのだ。

「…誰だてめえ…」

リアナが気絶しているだけだということを確認して、そう問いかける。

「俺はノイル。ある組織の研究員兼戦闘員だ。目的はこのガキを拉致すること、だからお前やこの倒れてるガキに手をかけるつもりはない。わかったな?理解したなら俺達、“ゲイル”に手を出すなよ?じゃあな!」

言うべきことは言ったと男は少女を抱えたまま颯爽と去っていった。

「悪い…リアナ…俺は行って…このままじゃ先に進めないから…」

あれから気絶したりアナを宿屋へと運びこんだ俺は、そう言っ
て部屋を後にしてこの街の情報屋の下へと急いだ。仲間を護れず、少
女を護れず、ボロボロになった己のプライドを取り戻すため、少女
を救うために“ゲイル”の情報を得るために……

「ここか…」

街から離れた場所にポツンと建つ洋館の前に立ち精神統一をする。

「よし！」

気合を入れ扉を破壊し中に入る。

「シャア!!!」

「シャツ!!!」

街を襲撃した仮面の暗殺者2人がすぐさま反応して俺に飛びかか
ってくる。

「……」

無言のまま刀を抜き床を蹴り、

「ッ!?!」

一瞬で距離を詰めそのまま斬り裂く、血飛沫を上げながら倒れ行
く敵に目もくれず俺は先へと足を進める……

「おいおい…忠告してやったのに追いかけて来たのかよ…」

呆れたと溜め息混じりに呟くノイル。

「黙れ…俺はお前を殺しにきたんだ…余裕ぶんなよ！」

怒鳴りつける俺に相変わらずの人を見下す態度でノイルは、

「おいおい…俺がお前に何をした？殺されなきゃならんほどのこと
をした覚えはないが…？」

とうそぶいた。

「ああ…あの時なら殺すまでの理由にはならねえ…アレを見なきゃ、ここまで殺意は抱かなかったさ…だがアレを見たからには俺はお前を…お前らを生かしておこうとは思えねえ！」

そう、ノイルを見つける前に俺はある部屋で見たことを後悔するようなモノを見ていた。

それは…魔物や人間を使ったえげつない実験現場だった。

それを見た瞬間、頭の中で何かが砕ける音と同時に俺は一時、意識を失った。

気が付いた時には記憶にあるよりも大量の血で汚れた状態で今の部屋の前に立っていたのだ。

「あ…アレを見たわけね…で、アレがどうした？俺等が生きるために動物を殺すのと何ら代わりないと思うが？」

「…もういい、黙れ！」

ノイルの言葉を最後まで聞いていられないとそう怒鳴り足下に炎の魔力を溜め爆発させて飛びかかる。

「はっ！何にキレてるのか知らんが…忠告を無視した以上は殺されても文句言つなよ！」

刀の一撃を左手で受け止めながら右からのカウンターを放ちながら言葉を紡ぐノイル。

左手でノイルの右ストレートを捌き受け止められたままの刀に力を込める…バキッ！？と鈍い音が響くと同時に、

「ぐああああ！？」

左手から血飛沫を上げ斬られた痛みにたまらず叫び声を上げるノイル。

「ち、くしょーがあ…！」

片腕を潰された事で冷静さを失ったのか無謀にも突進してくるノイルに一切の容赦なく刀を振り下ろす…

辺りを血に染め倒れ伏すノイルの遺体。

身体中を血に染めながらも拉致された少女を探すために先の部屋へと進んだ。

そこには少女と予想外の人物が…

「お疲れレオン」

と、上機嫌に俺の名を呼びながら水の精の力で俺の身体についた血を洗い流してくれたリアナ。

「なるほど…な、これなら納得だぜ。あんなザコに何で気絶させられたのか疑問だったんだ…」

そう手合わせした感覚ではグリムの方が上でありリアナがあっさり気絶させられるはずがなかったのだ。

ただ、気配を消す能力だけは異常に高かったが…

「あはは…ごめんね？一網打尽にした方がこの子のためになるかなあ…って…」

「なるほどな…その子を助けるためだったんだな…なら気にするな！と…大丈夫か？えっと…」

「あ、エミリーです。助けて頂いてありがとうございます」

と自己紹介と共に礼儀正しく頭を下げるエミリー。

「そうか、無事で良かったなエミリー。と…とりあえずここを出よう」

「そうね…ボルテノールならテレポート出来る範囲だし…宿で話しましょ」

そうしてリアナの魔法が発動し、俺達を光が包んだ…

「つまり、エミリーは師匠が出した課題の一環として旅をしながらこの街に来るまでも“ゲイル”の連中に狙われていた。そんで、この街の前までは師匠の知り合いの騎士に護ってもらってたってことか？」

「はい…その騎士さんもちょうど国境の街サハデによろしかったみ

たいで……」

「ここまで話を聞いて俺はエミリーのことを心配しリアナも同様に心配していたようなのである提案を試してみた。」

「なあ、エミリー。俺とリアナを仲間にしないか？」

「あ、それいいね エミリー一緒に旅しようよ」

「え……？で、でも……」

「危ないから……とかなら心配するな。俺達は強いからな！それに目的のない旅だからな……目的地が決まるっていう点では助かるんよ」
「渋るエミリーにそう言っただけで笑いかけるとエミリーは頬を赤く染めながら、」

「そ、そうなんですか？……えっと……それならお願いします」

とまたまた礼儀正しく頭を下げてくるエミリー、

「よろしくね、エミリー」

リアナが明るくそう言っただけでエミリーの手を握る……こうして俺達は新たな仲間を得たのだった。

「……こうして運命の歯車は動き出す……」

第六話・動き出した歯車（後書き）

敵が人だと描くの難しいですね…あ、ちなみにエミリーは弓使いです。感想等お待ちしています。

第七話：ノイルと妖刀（前書き）

戦闘描写少々…どござm（
）
m

第七話：ノイルと妖刀

“ゲイル”というギルドは、帝都の下町の不良集団が大きくなり築き上げた帝国の汚点とも言える存在である。“ゲイル”は不良集団の中の頭の名であり……“ゲイル”を追え！！の一部よ

俺、レオンはリアナとエミリーといった両手に華の状態で次なる目的地である信仰の村ラピュサンへと向かっていた。

一つ言いたいのは俺はこの両手に華の状態を誇りたいわけではない。むしろ、仲間が男がほしいくらいだ。

理由は単純、仲間がいるのに少々除け者にされてる感があるからなのだが……

と、のん気に考える時間は突然周囲を取り囲む悪意ある一団により砕かれてしまう。

「……………」
「“ゲイル”の下っ端か……」

敵の姿を確認し俺は刀を抜き、リアナは杖を構え、エミリーは弓矢を構える。その時

「よお、また会ったなあ……ガキ」

いるはずのない、生きているはずのない男……ノイルが姿を現

した。

メガネの奥の瞳に俺を嘲笑う色をみせながらノイルは言葉を紡ぐ
「お前が殺したのは俺が細工した下っ端さ！まず第一に俺の武器は
刀だからな！」

俺は驚きつつも行動を開始した。刀を下段に構えノイルに向かっ
て跳ぶ、ノイルの部下達は俺に向かうことなくリアナとエミリーの
下へと向かう。

「1対1が望みかよ！いい度胸してんな！」
遮る者のない空間を駆け抜け抜けノイルの下へと向かう。背後で

「天神弓！」

エミリー飛び上がり放った剛の力を纏いし矢が敵の武器と防具の
ことごとくを粉碎し、

「芽吹け！」

リアナの力強い言霊が大樹を召喚しその根に敵は捕らわれ動きを
封じられる。

仲間の心配は不要だなと再認識して刀を振り上げる。

「今回は本当の俺の恐ろしさを教えてやるよ」

俺の刀の一撃を刀で防ぎながら呟くノイル。

無言のままノイルを蹴飛ばし一時距離を取る。

「しかし、予想外だったぜ…まさか、ちよつとの留守を影武者に任
せてる間にガキを奪われるなんてな！」

体勢を立て直し刀を振り下ろしてくるノイル。

「ちっ！」

避けれる速度ではなく舌打ち混じりに刀で受け止める。すると…
パキッと嫌な音が響き刀に亀裂が入ってしまった。

すぐさま距離を取ろうと後ろに下がったのだがノイルは追撃の手
を緩めることなく詰めてくる。

隙のない流れるような連続技が俺を、俺の刀を徐々に追い詰めて
いく…

「そこだあ！」

叫び声と共に俺に向かってくる刃、俺は避けることをせずに刀を握る手に力を込めて柄で思い切りノイルの刀を殴りつける。

「なっ!?!」

驚愕の表情を浮かべるノイルに間髪入れずに斬りかかる。が、それは左手のグローブにより弾かれてしまった。(不味いな…刀は後一撃保つか保たないか…こうなりや賭に出るか…) 心の中でそう決断するや否や再び空いた距離を一息で詰め刀を振るう。

「バカが!」

刀の強度を顧みない俺の行動を自暴自棄と取ったのかそう言い放ち俺の刀目掛けて己の刀を振り下ろす。ドンツ鈍い音が響くと同時に俺の刀は半ばから折れノイルの刀は宙を舞う。

ノイルは何が起こったか解っていないのか呆けた顔をしている。

俺はその隙を見逃さず跳躍しノイルの刀を奪い、奴の眼前に構える。

「…何をしたんだ…」

静かに諦めを含んだ声色で問いかけてくるノイルに、

「答える気はない」

俺の炎の力と闘気とを合わせた剛龍爪(眼に見えない爆風を纏う剣技)により飛ばしたのだが答えてやる義理はないので一言で切り捨ててやった。

「そうか…」

「つつ!?!」

何かを言いかけたノイルの言葉を聞く前に俺は大きく飛び退いた。その次の瞬間には、ノイルの首が突如乱入してきた者の手中に収まった。

頭を失い血飛沫を上げ倒れ伏す屍…

「レオン!!!」

「レオンさん!!!」

ノイルとの戦闘でもとの場所から大分離れてしまっていたようで、今、リアナとエミリーが姿を現した。2人とも無傷とまではいかな

いまでも見る限りは大きな外傷はないようだ。

「おやおや…見知った顔が2人も…おっと、失礼レオンさん。またもや獲物を奪ってしまいました」

悪びれた様子もなく4つの鎌を背負い頭を下げるヤイバ。

「私、任務で“ゲイル”を潰してきたところでして…確認出来てない最後の幹部が目に入りましてレオンさんの姿を認識する前に武器を放ってしまいましたね…誠に申し訳ございません」

言葉の通り大量の血を浴びた様子のヤイバは腰に8つの男の首を提げノイルの首を抱えたまま、もう一度頭を下げた後、「先を急ぎますので…」と言って姿を消した。

暫し啞然としていた俺達だが…

「あの…その…」

遠慮がちなエミリーの声によつてはつとなり、

「よし！切り替えて進むわよ！！」

「……………」

言葉を発しようとしたのだが見事にリアナに奪われてしまった…

何はともあれ俺達の旅は俺の刀をノイルの扱っていた妖刀“紅”

(仮)に替え続いたのであった。

その刀が更なる面倒事を運んで来るとも知らずに……

第七話：ノイルと妖刀（後書き）

妖刀“紅”と名付けたのはレオンが昔、刀の紹介誌を読んだ中で見た刀に似ていたからであります（、、、、、）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4080y/>

デスティニー・クロス

2011年12月9日23時48分発行